

## わが国における「世界史」理論の歴史（2）

——科目「世界史」成立期の世界史理論——

有 田 嘉 伸\*

(昭和63年10月31日受理)

### A Historical Study on the Theory of “World History” in Japan（2）

Yoshinobu ARITA

(Received October 31, 1988)

#### 1. はじめに

戦前、わが国の中等学校における外国史教育は、西洋史と東洋史の2本立てで行われた。戦後の1947年、6・3・3・4制の新学制が行われるようになり、同時に新しい教科として社会科が成立したが、西洋史・東洋史は高等学校社会科の選択科目として引き続き行われた。1947年には、学習指導要領東洋史編・西洋史編が公布された。科目名は戦前と同じでも、内容や方法については、単元学習の採用、問題解決学習の導入、社会経済史や文化史の重視、などに新しさが見られた。1948年10月、「新制高等学校教科課程の改正について」という通牒が発表され、国史(のち日本史と改称)が復活するとともに、外国史は西洋史・東洋史が「世界史」に一本化された。学習指導要領は新科目の発足までに間に合わず、翌1949年4月、「高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について」という通牒が出されたのみであった。この通牒について、高橋碩一は、「いままで文部省が出した通牒類の中でこの通牒ほど日本の教育の前進のために画期的な役割を果すべき内容をもったものはなかった<sup>(1)</sup>」と評価したが、「世界史」の目的や理念・構成方法についてはほとんど討議されることなく科目が成立したため、その後しばらく、「世界史」の理論についてさまざまな議論が展開されるとともに、「世界史」と銘打った多くの出版物が出現した。<sup>(2)</sup> それらの中で、当時の学界や教育現場の「世界史」に対する考え方を最もよく示しているのが、尾鍋輝彦編『世界史の可能性—理論と教育—』（東京大学協同組合出版部、1950年3月30日発行）である。<sup>(3)</sup> 本稿では、同書を中心に、科目「世界史」成立期の世界史理論を検討するとともに、当時出版された代表的な教科用図書における「世界史」の内容構成について比較検討する。

---

\*長崎大学教育学部社会科教育教室

## 2. 世界史の基本問題

「一つの怪物が、1949年の日本に突如として現れた。社会科世界史という怪物が。文部官僚も、西洋史家も、東洋史家も、はたまた日本史家もこの怪物の正体がつかめない。ましてこれと取り組む運命におかれている高等学校の教師と生徒にとっては、難解なることゴルギアスの結び目の如くである。」<sup>(4)</sup>『世界史の可能性—理論と教育—』はこのように書き出している。しかし、「世界史」という怪物は、「出現する必然性をもっている」ようだし、「わが国の教育に新しい希望を与える」ものであり、「歴史学を正しい道に導くものである」ようにも考えられた。本書は、1949年に東京周辺在住の歴史学者・地理学者を集めて行われた「世界史の基本問題」についての座談会の記録と、「世界史の可能性」について論じた8つの論文から構成されている。

座談会の出席者は次の人々であった。飯塚浩二（人文地理）、石母田正（日本史）、江口朴郎（西洋史）、尾鍋輝彦（西洋史）、倉橋文雄（西洋史）、橋高信（高校教諭、世界史）、遠山茂樹（日本史）、中村元（印度哲学）、増田四郎（西洋経済史）、三上次男（東洋史）、村川堅太郎（西洋史）、矢田俊隆（西洋史）、山本達郎（東洋史）。

これらの出席者は、ともに世界史可能論者であり、大戦中有力であった京都学派や文化伝播説に反対し、発展段階のないし自己発展の見方を是とする立場をとる人々ばかりであった。当時、高等学校の現場では、世界史不可能論者や懐疑論者も多く存在していたが、在京の学者・教育者の中にしっかりした意見をもった反対論者が得られなかったためである。また、出席者の大部分が専門史家であるため、教育面の掘り下げが不足し、「世界史」の構成や具体的な記述内容についてはほとんど論じられなかった。

まず、「世界史」成立当時の高等学校の現状について語られている。上に述べたように、1949年4月、文部省教科書局長から「高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について」という通牒が出されたが、この時点では「世界史」の学習指導要領は未だ出来あがっておらず、学習指導要領東洋史編・西洋史編を参考に使用してさしつかえないとはいうものの、「世界史」の目的や理念をつかむことができず、迷っている状態であった。即ち、「世界史」は「実際に授業をする教師自身の潑刺としたとした研究と努力と実践とによってのみなされるものである」といっているとしか考えられない<sup>(5)</sup>ものであった。ここにおいて問題となるのは、社会科の一般目標にそって「世界史」をいかに構想するか、ということであったが、日本では未だ学問的に「世界史」の研究がなされていないので、構想の拠り所がなかった。また、授業形態では単元学習が望まれるところから、教師の講義ではなく、生徒自らの学習意欲を根幹として、グループ＝システムを生かした自学自習が理想とされたため、教師は慣れない聞き手にまわらねばならず、生徒は、グループ学習は入学試験に不利であるという不安感を抱いている者が多かった。<sup>(6)</sup>

次に、「世界史」を構成していく際の西洋史と東洋史の比率が問題となっているが、ヨーロッパ中心史観の優勢な当時の「世界史」では、西洋史が中心で東洋史が一寸くっついていくということになりがちであった。尾鍋輝彦は、西洋史と東洋史の比率は7対3位が良いと主張しているが、<sup>(7)</sup>西洋史と東洋史を一定割合ずつ寄せ集めれば「世界史」ができあがるとする考え方そのものに疑問が出され、世界史の理論に議論が展開していく。

遠山茂樹は、東洋と西洋という概念が何時ごろ、どのような歴史的条件の中で成立した

のか、また、その東洋が西洋に結びつけられて世界史という概念が出てきた歴史的根拠が明らかになれば世界史の理念もはっきりする、<sup>(8)</sup>として、世界史の概念の成立時期が考えられている。尾鍋輝彦は言う。東洋社会を含まない世界史は、ヨーロッパには産業資本の発展以前からあり、アウグスチヌスの『神国論』などはその代表例であった。通常、産業資本の世界市場形成過程において世界史が成立するというが、そのようなヨーロッパ中心の世界史では、東洋社会は附随的・植民地的なものとしてしか取り上げられていない。我々が現在問題としている世界史では、東洋社会を非常に大きなものとして取り上げなければならない、<sup>(9)</sup>と。それに対し、遠山茂樹は、ヨーロッパ産業資本の東洋進出で、ヨーロッパ人はヨーロッパ近代社会と非常に質的に違った東洋社会を発見し、その原因を、東洋社会の停滞性にあるとした。しかし、産業資本興隆期の東洋社会の捉え方と、帝国主義段階に入ってから東洋社会の捉え方はまた違いがあり、新しい世界史は、ヨーロッパ帝国主義の東洋植民地化政策の立場に立つ世界史を克服したものでなければならない、<sup>(10)</sup>と主張している。

三上次男は、世界史の構成方法について、(1)世界の各地方の歴史を網羅的に捉える、(2)世界の歴史を文化相互の伝播や影響から捉える、(3)世界史を一つの理念・理論をもって構成する、の3つに分類している。このうち、(1)は全体的統一がつかないので適当でなく、(2)も文化の起源が一元的か多元的か議論があって文化伝播説の基盤がしっかりしていないため適当でないとする。そして、(3)の方法こそ重要であるが、それは、西洋と東洋が別の世界であった時代に存在したヨーロッパの神学的世界史や進化論的世界史、中国の『史記』『資治通鑑』的世界史では不十分で、世界が一つになった現在要求されている世界史は、「世界が近代化していく過程、あるいは民主化していく過程を集中的に捉える」ことを中心課題として書かれねばならない、<sup>(11)</sup>と主張している。

古代・中世史家の石母田正は、19世紀なかばの世界市場の成立と、それに対する東洋の抵抗という問題を基礎として出てくる世界史というものの画期的な意味を根本において考えなければならないが、近代以前の古代・中世にも近代とは質の違う世界史があったことを主張する。即ち、古代では、ローマ帝国、アレクサンドロス帝国、漢帝国のような「他民族の隷属または臣従によってのみ成立する」世界史であり、中世では、近代の諸民族の前提が形成されるとともに、各民族が孤立排他的になった世界史である。「このように歴史の諸段階によって、世界史の在り方そのものが根本的に違うということが追求されないでは、本当の意味において何故19世紀以後の世界史が本当の成立か、あるいは、現在何故世界史を問題にするかということが明らかにならない。」<sup>(12)</sup>「遅れた民族であろうと、進んだ民族であろうと、根本的には同じ法則性があるということについての世界史的な平等性があり、初めて世界史は成立し得る。それがないと質の異なった諸民族の文化の単なる交渉と伝播だけが、世界史を成立させる媒介となるということになる。」従って「世界史を作ってきたそれぞれの民族に平等の資格を与え、その上に古代なり、中世なり世界史的なつながりをはっきりさせて行かなければならない。」<sup>(13)</sup>さらに、現在の帝国主義の段階では、世界の隅々が大きな国によって分割し尽くされたばかりでなく、大戦後資本主義の発展の不平等性が極端になって、巨大な生産力をもつ一、二の国家と、すべての後進民族や資本主義国家が、従来の近代社会では想像も出来なかったような関連を持たざるを得ない段階にきている。そのような諸民族にとって、世界史は外部の問題でなくて、内部の本質的な問

題に転化しつつある。」ここに現代の世界史の特質がある、<sup>(14)</sup>と石母田正は述べている。石母田の主張には、世界史の発展法則と民族の固有性の問題や、世界諸地域の不均等発展の問題、帝国主義時代における前近代的要素の役割の問題など重要な問題を含んでいたが、議論は十分に深められないままに終わった。

その前年、『世界史における東洋社会』（毎日新聞社、1948年6月20日発行）を出していた地理学者の飯塚浩二は、世界史の考え方として、(1)互いに独立的な諸世界が並存し、その間に文化の伝播だけが問題になる場合、(2)単純に商業資本の媒介によって成立し、ルーズに連ねられている世界(例えばイスラム文化圏)、(3)近代の資本主義を基軸として成立した一元的な世界、の3つをあげ、今一番大きな問題は、(3)の世界史がどうして作りあげられたか、その中で東洋なり日本なりがどういう位置をしめるか考えることである、と述べ、文化人類学の成果にも触れているが、<sup>(15)</sup>進歩や発展段階説を軽視する考えは歴史学者からは支持されなかった。

増田四郎は、「歴史家個人の到達し、意欲する歴史観とか、理念によって貫かれている筋金の通った世界史」と、「単に抱括的に何でも入れてそれを自分達を中心に安心して綜合出来るという世界史」とは違うとして、歴史家に積極的な理念を求めるとともに、特に東洋史の「研究の道具だて」「文化を構成している要素」「時代分けの問題」などがわからず、「時代性と社会構造を見極める方法」が確立していないために、西洋史と東洋史を一緒にして世界史として把握することは困難である、<sup>(16)</sup>と述べている。また、矢田俊隆は、世界史の問題は、「人類全体を統一的に把握しようとする意図」と関係しており、「我々に課された現代の世界ないし社会の問題を実践的にどう解決していくか」ということと深い関係をもっている、<sup>(17)</sup>と述べている。

発展段階理論が多くの出席者に支持されるなかで、ランケの世界史や京都学派の世界史に対する批判が展開された。増田四郎によると、発展段階説は、その人たちがおかれた時代性とか、その国民の発展して行く方向とかを見定め、それを通じて転換の必然性を知らうとする、非常に実践的な観方である。それに対してランケの世界史は、ヨーロッパ諸民族・諸文化のいろいろな意味での「関連性」の形成・発展を実証的に、また構造的に浮彫りする仕事であり、究極的に「ヨーロッパ世界」の関連的な生成であり、ヨーロッパ中心的世界史である、<sup>(18)</sup>という。また、尾鍋輝彦も、京都学派はランケの影響を受けながら、しかしヨーロッパ中心的不是な新しい立場をとろうとしたが、その結果は大東亜共栄圏理論になったり、文化圏理論になった、という。そして、ランケの立場を克服しない限り、新しい世界史は成立しない。現実の史的な交渉、即ち関連というものを、世界史を構成する必須条件にする限り、どうにもならない。京都学派の世界史では、ある社会にいろいろな要素があるということに力が注がれており、その時代の「支配的なもの」に対する観念が欠落している。結局、歴史に対する態度が静態的である。このような立場では世界史は成り立たない、<sup>(19)</sup>と述べている。

この他、座談会では、新しい世界史における東洋の役割の重要性に関連して、東洋と西洋の発展の比較の問題や、中華人民共和国の成立などアジアの最近の動向の意義づけが討論され、歴史学と歴史教育が現実的実践的課題と結びつくべきであることが共通理解として確認された。

### 3. 世界史の可能性

本書の後半は、「世界史の可能性」をめぐる論じられた8つの論文から成っている。

三上次男「世界史は成り立ちうるか」は、世界史を構成する方法や問題点について論じている。世界史の概念として、上記の座談会でも述べた、(1)網羅的記述、(2)文化交流的記述、(3)発展段階説など一つの理論による記述、の3つをあげ、(3)の立場を支持している。また、歴史哲学としての世界史と、歴史教育における世界史は、空間的・時間的・概念的に違いがあることにも留意しなければならない、という。世界史とは、「一貫した理論をもって、一個の統一的・発展的な世界を考え、その成り立ちを叙述するものである。」その組み立てに必要な要素は、(1)単なる自然的な歴史記述ではなく、様々の歴史事実を統一的に組み立てたものであること、(2)その統一的に組み立てた歴史に何らかの特別の価値を認めていること、(3)統一された歴史をつくり上げようとする特別の意欲が存在していること、である。そして、現在の世界史に必要欠くべからざる要素は、「世界の近代化・民主化の問題」で、世界が、東洋といわず西洋といわず、遅速や性質の差はあっても、絶えず近代化し、民主化していく事実をしっかりとつかみとり、その過程を実証的にあとづけることこそ、世界史の何より大切な組み立て方である。」その際、我々の立つ場（生活圏・日本・東洋）の理解から出発し、東洋の近代化の過程を理解の根底におき、より具体的な世界史像をつかむことが必要である、<sup>(20)</sup>と主張している。

増田四郎「世界史と時代分けの問題」は、世界史の成立と関連して時代区分の問題を論じている。今日普通に行われている古代・中世・近代という三分法は、もともとヨーロッパという極めて特殊な「世界」を前提とし、ヨーロッパの人間精神史、文化発展そのものの律動の結果としてもたらされたものである。故に、これをそのままのみにして、異なった文化領域または民族史にあてはめるには無理がある。従って東洋の時代区分においては、まず近代の意味をはっきりさせ、その基準から東洋の中世・古代の意味を考えなければならない。東洋文化圏の固有性を充分考慮しつつ、その新しい時代分けに即して、史的素材と内容を組み入れていくことが重要である、<sup>(21)</sup>と述べている。

西井克巳「世界史成立の根拠」は、世界史は歴史的普遍性を絶対不可欠の条件とする、と主張している。世界史の担い手は、普遍的な行為的人間、即ち人類であるが、人類一般は見出しえず、現実に存在する最も広範な人類は民族である。故に、現実にある歴史は民族史であり、しかも民族は人類の特殊かつ最も具体的な存在形態であるため、かかる民族史の中にこそ世界史は内在する。そして、民族史の中にある普遍性を抽出することによって世界史は成立しうる、<sup>(22)</sup>と述べているが、これはむしろ歴史哲学的な世界史の把握の仕方といえるであろう。

江上波夫「新しい世界史への構想」は、唯一諸論稿と趣を異にし、発展段階理論による世界史に批判的である。即ち、世界史には、世界の一体化、人類活動の世界化によって成立する空間的な横の拡がりとしての世界史と、世界が地球上に現れてから今日に至るまでの経過を、一民族、一国家、あるいは諸民族、諸国家のそれとしてではなく、人類全体の動きとして把握し、具象化した人類史としての世界史がある。唯物史観も人類史としての世界史の代表的な一例だが、それは、未開社会の人類に関する貧弱な知識や、幾多の誤謬に満ちた仮説の上に立っていて、今日そのまま存立しうるものではない。にもかかわら

ず、唯物史観を除いて、人類史としての世界史が体系づけられ得なかった理由は、第1に、いわゆる「歴史」なき人類の世界、即ち先史時代や未開人の世界は、長い間人類史の未知の空白の部分として放置されてきたが、近年の考古学・民族学・社会人類学等の発達の結果、「歴史」なき人類の世界が、「歴史」ある人類の世界の重要な根底・基盤であることが判明し、前者を軽視した人類史は不完全なものであるという認識が生じたからである。また、「歴史」なき人類の世界についての知識はどんどん変化しているため、新しい人類史を構想することは時期尚早と考えられてきたが、遠からず考古学・民族学・社会人類学の立場からの人類史としての世界史が体系化されるであろう。第2の理由は、「歴史」なき人類と、「歴史」ある人類との、歴史に対する取り扱い方の相違からくる困難性である。即ち、「歴史」ある人類の歴史は、間接史料たる文献によって歴史を考えることができるが、「歴史」なき人類の歴史の場合、政治・経済・社会・文化など人類活動の所産のすべてを含む「文化現象の総体」を他の社会集団のそれと比較し、「文化複合体」を把握すること、即ち文化の総体的比較研究によって初めて可能になる。その手続きによって、「文化複合体」の重なり合いである「文化層」と、「文化複合体」の拡がりである「文化圏」が決定されて、「歴史」なき人類にも歴史が与えられることになるのである。このような方法を文化史的研究法というが、その方法による「新しい世界史」の視点として、次の3点をあげている。(1)人類の動き、変化には一定の方向がある。それは、自然人(人間が自然の影響を強く受ける)→人間集団(集団をつくって自然から離脱する)→個人(人間集団の権威から個人が離脱して独立する)と進むであろう。(2)人類の発展・進化の原動力は、人類の価値観の変化・動揺で、その変化は地理的環境に密接な関係がある。(3)人類の発展・進化の方向は一定しているが、その実際の動きは、全人類一様ではなく、同形でもなく、連続的でもない、<sup>(23)</sup>と。このような江上波夫の予見は見事的中し、その後日本の「世界史」は、1960年代から、発展段階論にかわって文化圏重視の方向に動いていき、今日に至っているのである。

江口朴郎「帝国主義時代における発展段階」は、帝国主義時代において、それぞれの社会の発展段階が、一国の社会の発展問題として図式的観念的に固定した発展段階の尺度では論じえないこと、そして、そのことは帝国主義時代のみの特徴ではなく、資本主義社会成立以前の時代に関しても、歴史の発展段階が論ぜられる場合、異なった社会や民族の接触の仕方、征服・被征服という関係等の有する社会的階級的意義がより多く問題になるべきである、と述べている。さらに、世界史を把握するためには、豊富に展開されてくる現実そのものの中で、「批判し変革するものの立場に立つこと」を主張している。<sup>(24)</sup>

石母田正「世界史成立の前提について」は、マルクスの世界史理論を展開している。まず、世界史について考える場合、現実の歴史過程としての世界史と、その認識および叙述としての世界史を区分して理解しなければならないという。<sup>(25)</sup>ここでは、特にヘーゲルとマルクスの世界史認識を比較して、ヘーゲルの世界史の解体の上に樹立されたマルクスの世界史の成立は、(1)世界史の物質的基礎としての世界市場の成立およびそれによる地方的孤立性の打破、(2)「世界史的存在」としてのプロレタリアートの成立、(3)プロレタリアートによる世界史的認識の確立、などの諸契機を含み、生産力の資本主義的段階において初めて成立する、と述べている。また、これらの諸契機は、プロレタリアートの変革的な共産主義の運動と組織のなかに統一されるべきものである点で、従来の一切の観想的な世界史とは根本的に区分されるものとして評価している。<sup>(26)</sup>

その他、高橋碩一「社会科『世界史』をどう生かすか」と、橋高信「社会科世界史の理論と学習活動の指導について」という歴史教育関係の2論文がある。高橋碩一は、「歴史が進歩への発展であることを理解することにより社会進展に対する自己の責任と情熱をいだけかしめる」<sup>(27)</sup>ためには、まず各自が課題として捉えた問題を、「歴史の発展の必然性」において「総合的・発展的に」捉えることであって、単なる比較や統合からは、現実の課題は、なんら解決されない。今日世界史教育が目標とすべき点は、「世界平和」において他にない、<sup>(28)</sup>と述べている。また、橋高信は、このたびの「世界史」は、世界史学の発達の結果生まれた科目ではないが、当然学問的背景をもたねばならないし、「社会発展の当為の学としての世界史」の学問的研究を要請したい、という。とりあえず、現在社会科「世界史」のよるべき理論は、(1)人間の経済的営みを下部構造とする科学としての歴史学の理論、(2)社会的人間教育としての教育学の理論、(3)民主国家政治としての政治学の理論、(4)国際的当為としての人倫の学の理論、をあげている。また、社会科「世界史」が触れていく人間の社会の具体的な姿は、地域的・歴史的なものである。そして、そのような地域性、時代性は、その地域、時代における人間相互の関係の営みが生み出したものである。「世界史」は、各時代の様々の国家・民族の営む社会の具体的な姿を捉えて、その中から総合的に人間社会の発展の段階や姿を抽出して概念化することが出来る。こうして広範な「世界史」も何等かの形で現実の諸問題に挑みかかる生徒の関心の中から学ぶことが出来、教育的要請に向かって将来の社会への実践的意欲を昂揚することが出来るのである、<sup>(29)</sup>と。

以上、座談会の主な発言と8つの論文の主張の要点を紹介したが、圧倒的多数の人が、理論によって世界史を記述すべきこと、その際最も妥当なのは発展段階論であることを主張している。そして、ランケ史学を継承した京都学派の世界史や文化伝播説に批判的である。しかし、その中であって、東洋社会の発展の特殊性を強調して、文化人類学的把握の必要を主張した飯塚浩二や、特に原始社会の歴史に関して唯物史観の非実証性を批判し、文化史的研究による世界史を主張した江上波夫の主張は注目すべきである。その他、ヨーロッパ中心史観に対する批判、世界史における西洋と東洋の発展の比較や、新しい世界史において東洋の占める役割に関連して、アジアにおける最近の動向が論じられた。その中には、世界史の捉え方のほとんどすべてが出ており、本書に世界史理論の原点を見ることが出来る。

#### 4. 初期「世界史」教科用図書における「世界史」の構成

戦後、新しい歴史教育の観点で書かれた最初の外国史の教科書は、『西洋の歴史(1)』（中等学校教科書株式会社、1947年8月3日発行）である。同書には著者名が記されていないが、東京大学の今井登志喜の指導の下に、林健太郎、矢田俊隆、金沢誠、椽川一朗、板倉勝正らによって執筆された。<sup>(30)</sup> その構成は、8ページの表のようになっているが、その章・節のたて方は、大体学習指導要領西洋史編に従っている。序説は、「歴史と地理」「過去と現在」「東洋と西洋」の3項より成っている。まず、「歴史は連続せる地理であり、地理は静止せる歴史である」と両者の関係の密接なことを述べ、次に、歴史を学ぶ目的は、「単に過去を過去として研究するのではなく、現在の理會を更に正確にするためである。」<sup>(31)</sup>と述べている。「東洋と西洋」の項では、「先史時代において、概括的な世界史というものが考え得られる」が、「歴史時代に入ると、文明はおのおの独自の性格を發展せしめ且つ極めて多彩な

## 『西洋の歴史(1)』

- 第1編 文明の起原と発達
  - 第1章 先史時代
  - 第2章 古代東方(オリエント)
- 第2編 古典文明(ギリシア及びローマ)
  - 第1章 ギリシア人の興起
  - 第2章 ギリシア世界の拡大
  - 第3章 ギリシア人の遺産
  - 第4章 ローマの建国と共和政
  - 第5章 ローマ帝国
- 第3編 西欧世界の形成—中世世界の展開
  - 第1章 西欧世界の成立と東方の情勢
  - 第2章 中世西欧世界の完成
  - 第3章 中世世界の変化
- 第4編 人間精神の解放と世界の拡大
  - 第1章 文芸復興
  - 第2章 近代国家の発達
  - 第3章 アメリカ合衆国の建国
  - 第4章 18世紀の社会と風潮

と、(2)西洋史においては古代・中世・近世の時代区分がはっきり立てられるが、東洋史では時代区分が明確でないこと、(3)西洋文明の成り立ちは極めて多元的だが、東洋文明は質的な変化が少ないこと、を述べている。<sup>(32)</sup>

このような考え方が支配的であった時に、その目的も理論も明確に示されることなく科目「世界史」が設けられたため、上に述べたような混乱が見られたのである。学習指導要領社会科編Ⅲ(a)日本史(b)世界史が出されるのは1952年3月20日で、文部省検定済の「世界史」教科書が出されるのはそれ以後だが、それ迄に、教科書に準ずる教科用図書が次々に出版された。

今井登志喜監修『世界史概説』上・下(日本出版協同株式会社, 上1949年4月5日, 下1949年4月15日発行)は、林健太郎、板倉勝正、矢田俊隆らが中心となって、東京大学西洋史研究室関係者が執筆した教科用図書である。「世界史」と銘打っているが、著しく西洋史偏重である。特に上巻は、『西洋の歴史(1)』の存在を前提に書かれているため、概説的知識はこれにまかせ、本書では歴史上の人物・事件・神話等についてのエピソードをふんだんに取り入れ、物語記述を特色としている。東洋史についての記述は全くなく、わずかに

ものになるので、これを一括して世界史を書くことは不可能となる。ここにおいて東洋を一箇の全体と見る東洋史と、西洋を一箇の全体とみる西洋史とが分離する。」「しかるに近世になると、欧人の東洋来航によって東洋と西洋とは再び一体となって世界史を構成するに至る。」「ことに19世紀以降の歴史においては、世界史的観点に立たなければ正しく歴史を理(ま)会することはできない」とする。そして、西洋史と東洋史の相違点として、(1)西洋史は歴史の舞台の主役が

はなはだしく交代するが、東洋史においては常に中国・インドが主舞台; 主役であったこと

## 『世界史概説』

(上巻)

- 第1章 先史時代
- 第2章 古代東方
- 第3章 ギリシア
- 第4章 ローマ
- 第5章 中世
- 第6章 ルネサンス
- 第7章 地理上の発見
- 第8章 宗教改革
- 第9章 東西文化の交流

(下巻)

- 前篇 市民社会の成立
- 第1部 フランス革命
  - 第1章 フランス革命前史
  - 第2章 フランス革命
  - 第3章 ナポレオン時代
  - 第4章 自由と保守の対立
  - 第5章 自由主義、国民主義、民主主義、社会主義及び国際主義の発展
- 第2部 産業革命
  - 第1章 産業革命前史—資本主義の発生
  - 第2章 産業革命
  - 第3章 アジアの社会と回教社会
  - 第4章 資本主義の性格
- 後篇 市民社会の発展
  - 第1章 帝国主義時代
  - 第2章 第一次世界大戦
  - 第3章 中間期
  - 第4章 第二次世界大戦後の世界
  - 第5章 19世紀20世紀の思潮

## 『世界史概観』

第1章 文明の発祥	
第1節 先史時代	第2節 自然に文明の起った地域
第2章 古典文明の生成	
第1節 ギリシャ文明	第2節 ローマ帝国の成立とキリスト教
第3節 インド文明の展開	第4節 中国の古典文明
第5節 民族の大移動	第6節 東アジア諸国家の変遷
第3章 中世世界の展開	
第1節 イスラム世界の発展	第2節 中世ヨーロッパの形成
第3節 西欧封建社会	第4節 中国社会の変化と征服王朝
第5節 蒙古民族の発展	第6節 西欧中世世界の変化
第7節 インド、西アジアの変化	
第4章 近世市民社会の形成	
第1節 文芸復興と地理上の発見	第2節 宗教改革
第3節 ヨーロッパ専制国家の成立	第4節 東アジアの専制国家
第5節 ヨーロッパ諸国の植民活動	第6節 民主精神の発達
第7節 ヨーロッパ近世文化の成長	
第5章 近代的世界の展開	
第1節 ヨーロッパの変革	第2節 自由主義と保守主義との闘争
第3節 ヨーロッパ勢力の東漸とその影響	第4節 近代市民文化の発達
第6章 帝国主義とその結果	
第1節 帝国主義下の世界	第2節 第一次大戦とロシア革命
第3節 ヴェルサイユ体制の成立	第4節 第一次大戦後の世界
第5節 全体主義の台頭	第6節 第二次世界大戦の展開
第7節 第二次大戦後の世界	

第9章に「東西文化の交流」の章を設けて、西洋と東洋を関連づけようとしているにすぎない。一方、下巻で扱っている近・現代史の部分は、当時でも未だ教科書が発行されてなかったため、教科書の代用として使用されたことを考慮して、詳細に、理論的に記述されている。しかし、市民革命、産業革命、帝国主義などを軸として、西洋史中心に記述されており、東洋史に関しては、第2部第3章に「アジア的社会と回教社会」のタイトルで、中国・インド・西アジアの概観がされているにすぎない。故に、本書は、「世界史」と銘打っているが、古い西洋史以外の何物でもない。

同じ東京大学系のものとしては、同じ年、東京大学文学部史学会編『世界史概観』（山川出版社、1949年4月15日発行）が出版されている。著者は、村川堅太郎、山本達郎、林健太郎が中心となり、他に数名の執筆協力者があつた。こちらは、新科目「世界史」の設定に対応して出されたもので、序言で

次のように述べている。「今般高等学校の社会科教授要目に『世界史』が加えられたことによって、世界史の構想に関する論議が急激に盛となりつつある。それは従来我が国の歴史学界に於て、東洋史と西洋史とが截然と区別されており、また欧米人によって書かれた『世界史』は西洋史中心になり勝ちであった為と考えられる。依て吾人はかかる欠陥を補うため、総合的な『世界史』の叙述を企画したのである。」<sup>(33)</sup>と。内容構成は上の表のようになっており、基本的に西洋史の発展段階によって時代区分し、その中に東洋史を組み入れる形式をとっている。例えば、中国史の扱いを見ると、第1章第2節で新石器時代(彩陶文化・黒陶文化)を、第2章第4節で殷から漢までを、第6節で三国時代から唐までを、第3章第4節で五代・宋を、第5節でモンゴル帝国・元を、第4章第4節で明から清の盛時までを扱っている。同様に、インド・西アジアも西洋史にあわせて分断されている。このように、本書は、世界の各地域の歴史を西洋史の時代区分にあわせて分断し、同時代的・並列的に扱うことを目指している。本書はその後『改訂版世界史概観』(1950年)、『世界史』(1951年)を経て、『改訂版世界史』(1952年)から文部省検定済教科書となり、やがて『詳説世

**『新制世界史』**

年代	ヨーロッパ		中・西アジア		東アジア		南アジア	
	20 現代世界 ・ 21 新ロシア ・ 22 近代日本							
19 帝国主義と第一次大戦								
1900	15 自由主義	16 資本主義	17 近代文化	18 東洋の近代化				
1800	14 市民革命	9 砂漠の神秘	8 草原帝国	13 中国文化の極相		6 熱帯アジアの文化		
1700	12 近代国家			7 中国文化の拡充				
1300	11 近代世界			5 中国文化の生成				
0	10 神と世界と人	3 沃土の総り						
	4 古典世界	2 人類の起源と先史の世界						
-3000	1 序		説					

(図中の数字は章を示す)

け、この各地域について現実の歴史教授の時間数とにらみあわせて時代区分を行って22章に分けている。これを図示すると上の表ようになる。本書は文化圏別の世界史として、時代の連続性ととも地域連続性を強調し、各地域相互間の交流・伝播を重視して世界史が構成されている。

『新制世界史』をもとに、その後文部省検定済教科書として出されたのが、京都大学世界史研究会編『新しい世界史』(数学研究社、1953年3月10日発行)である。執筆者は、宮崎市定、村田数之亮、中山治一、前川貞次郎ら9名である。構成は基本的に『新制世界史』を継承しているが、特に近代以前の時代においては、より明確に文化圏別の構成をとり、すっきりした形になっている。序説は、1 過去と現在、2 地域区分、3 時代区分、4 歴史学の任務、となっている。<sup>(35)</sup> 先ず、世界史とは「人類全体の歴史」であると定義し、「世界史を学ぶことは人類を知ることであって」「世界史は人類が自己を反省するためにこそある」という。また、世界史が、地域区分を横糸、時代区分を縦糸として織りなす錦のようなものだという表現は、本書でも継承されている。地域区分と

世界史』(1959年)となり、今日まで続いていくことになるのである。

『世界史の可能性—理論と教育—』では攻撃的になった京都大学出身者による世界史は、世界史研究会編『新制世界史』(平安文庫、1949年6月発行)として出版された。<sup>(34)</sup> 執筆者は、井上智勇、宮崎市定、前川貞次郎など18名である。本書では、「世界史は地域区分を横糸とし、時代区分を縦糸として織りなす錦のようなものである」という考え方に立ち、まず、地域区分をヨーロッパ、中・西アジア、南アジア、東アジアに分

**『新しい世界史』**

<b>第1編 近代以前の社会</b>	
第1章	人類の起源と先史の世界
第2章	古代東方世界
第3章	西アジアの歴史と文化
第4章	南アジアの歴史と文化
第5章	東アジアの歴史と文化
第6章	古典文化の形成と発展
第7章	西洋封建社会
<b>第2編 近代の社会</b>	
第8章	近代社会のはじまり
第9章	近代国家の発展
第10章	17~18世紀の生活と文化
第11章	ヨーロッパの市民革命
第12章	自由主義と民族主義
第13章	資本主義社会
第14章	帝国主義の時代
第15章	東洋の近代化
第16章	19世紀の生活と文化
<b>第3編</b>	
第17章	第一次大戦の収拾と国際協調への努力
第18章	欧米民主主義国の再建
第19章	戦後のイタリアとロシア
第20章	ヨーロッパ外の世界の変化
第21章	世界恐慌の影響とその到来
第22章	独裁化の風潮と第二次大戦
第23章	第二次大戦後の世界
第24章	20世紀の生活と文化

## 『世界史研究』

## 世界史への導入

## I 人間はどのようにして文明状態にまで到達したか。

## 第1章 先史時代の生活

## 第1節 旧石器時代の生活 第2節 新石器時代

## 第2章 文明の発生

## 第1節 金属器時代

## II 古典文明はどのように発生したか。また、それはどのような遺産をわれわれに残したか。

## 第1章 都市国家と統一国家

## 第1節 古代東方およびアジアの国家

## 第2節 西洋古代の国家

## 第2章 古典文化

## 第1章 古代東方およびアジアの文化

## 第2節 西洋の古典文化

## III 封建制度はどのようなものであったか。また、それは世界各地でどのように異なった発展をしたか。

## 第1章 封建社会

## 第1節 西洋の封建社会 第2節 東洋の封建社会

## 第2章 宗教生活

## 第1節 キリスト教世界 第2節 イスラム世界

## IV 世界史上、人間精神はどのように解放され、また、発展していったか。

## 第1章 経済生活の発達

## 第1節 西洋の新気運 第2節 東洋の停滞

## 第2章 人間の解放と諸発見

## 第1節 人の発見 第2節 物の発見

## 第3節 土地の発見

## V 近代民主主義はどのような発展をしたか。また、それはどのような障害を乗り越えなければならなかったか。

## 第1章 民主主義の発達

## 第1節 アンシャン・レジーム 第2節 民主主義革命 第3節 近代文化

## 第2章 資本主義の発達

## 第1節 資本主義社会 第2節 資本主義の世界化

## VI 世界平和への努力はいかになされているか。また、いかなる努力が必要か。

## 第1章 民主主義の理想と現実

## 第1節 帝国主義と第一次世界大戦

## 第2節 ファシズムと第二次世界大戦

## 第3節 民主主義と平和運動

## 第2章 現代の課題

## 第1節 二つの世界 第2節 現代文化の課題

して、ヨーロッパは一つの歴史的地域をなすが、アジアは、西アジア、北アジア、東アジア、南アジアの4つの歴史的地域に分かれる、とする。しかし、北アジアは「つい近ごろまで独自の社会の発展をもたなかった」として、独立した章としては扱っていない。時代区分は、古代・中世・近代の3分法ではなく、先ずルネサンスを境として「近代以前」と「近代以後」に分け、近代の中から現代を取り出し、「近代以前」「近代」「現代」の3分法をとっている。これは、学習指導要領社会科編III(a)日本史(b)世界史に示された時代区分と同じだが、「近代以前の社会」については、完全な文化圏別構成をとっている。また、各時代における文化の重視も、もう一つの特徴といえることができる。

広島史学研究会編『世界史研究』上・下（柳原書店、上1950年3月5日、下1950年8月25日発行）は、ヨーロッパ中心の世界史である西洋史と、アジア中心の世界史である東洋史を単に結合したものではない世界史をめざして構成された。その構成は左の表のようになっている。編集者は、杉本直治郎、千代田謙、上野実義である。序章にあたる「世界史への導入」で、「世界史学習の目的」「世界史の構成」「世界史の研究法」「時代観念」などについて述べている。歴史学習の目的として、「個人的にも社会的にも、既成の事実を

土台にして、当面の諸問題を解決してゆく能力を養うことにある」といい、そのような目的にかなう歴史は、「片よらぬ歴史」「ゆがめられていない歴史」で、かつ「現代の立場を忘れぬ歴史」でなければならない、という。そのための世界史の構成として、いくつかの問題、即ち単元を設け、それを解決していくという形式をとっている。単元のたて方としては、西洋史の発展段階を尺度として、先史、古代、中世、近世(1)、近世(2)、現代の6つに分け、各時代における社会的・経済的・政治的・宗教的・文化的諸活動の重要事項を列挙し、各時代の最も重要と思われる問題を選び、それについて、西洋・東洋を含む全世界にわたって研究し解決するという方法をとっている。<sup>(36)</sup> 例えば、先史では「問題の提起と解決」、古代では「学問の方法」、中世では「封建制度」、近世(1)では「人間性」、近世(2)では「民主主義」、現代では「世界平和」を取り上げ、単元が作られている。即ち各単元がそれぞれ「一つの世界史」を構成しているともいえる形式で、世界史上の事実をいかに系統的に構成し、教えていくかという形式をとっていない。このような単元学習は、問題解決を通して思考力の育成をはかるのに有効で、まさに社会科「世界史」にふさわしい形式といえる。しかし、単元学習の形式をとると、あらゆる歴史上の出来事を網羅することは出来ないことや、問題別に事項を取り上げるため、西欧とアジアの同時代史にはならないことなどはやむをえない点であった。

その後、1952年3月に出された学習指導要領社会科編Ⅲ(a)日本史(b)世界史は、世界史でも単元学習をとることがふさわしいものとして、参考単元例としてA案～D案の4通りを示したが、教科書では、歴史事実を系統的に記述したものが支配的であった。

九州大学世界史研究会編『世界史』（世界社、1951年5月10日発行）は、九州大学出身者6名の共同執筆による教科用図書である。序説で、「歴史とは何か」「世界史の意義」「世界史上の民族」について述べている。その中で、世界史の捉え方として、文化圏と文化伝播を中心として捉える方法と、社会の自己発展と発展段階を重んじる方法があるが、本書はその2つの立場の総合を旨としている<sup>(37)</sup>と述べている。その構成は、章だけを示すと右のようになっている。構成の特色としては、東京大学文学部史学会編『世界史概観』に比較的近く、西洋史を中心とした時代区

#### 『世界史』

- 第1章 先史時代の世界
- 第2章 歴史の黎明
- 第3章 古典的世界
- 第4章 世界の転換
- 第5章 近代世界の胎動
- 第6章 近代社会の発展
- 第7章 帝国主義下の世界

分によって章だてを行い、東洋のインド・中国・西アジアの歴史を細分して、同時代的に組み入れる方法をとっている。例えば、第3章古典的世界を見ると、第1節ギリシア文化世界、第2節ローマの大国家、第3節キリスト教の誕生、第4節インドの宗教文化、第5節中国の古代国家、となっている。中国史の扱い方は、第2章第4節「中国の先進文明」で黄河文明から殷・周までを、第3章第5節「中国の古代国家」で春秋・戦国時代から漢までを、第4章第5節「東亜文化圏の成立」で三国時代から唐の盛時までを、第5章第3節「東アジア諸国家の変動」で唐末・五代から清の盛時までを扱っている。同様にインドの歴史も、第2、3、4章で3分されている。

その他、当時出版された教科用図書として、文部省内世界史研究会編『世界史読本』上・下（大地書房、1949年6月10日、下1949年10月30日発行）がある。この本は、文部省の名を冠しているが、文部省内にこのような研究会は存在せず、中等教育課の社会科関係者の関知しない著作であった。<sup>(38)</sup>

## 5. おわりに

科目「世界史」が成立した直後の世界史の理論と、当時出された代表的な教科用図書における「世界史」の構成を見てきた。東京大学出身者を中心とする当時最も支配的な考え方は、西洋史を中心として発展段階説で時代を区分し、それに東洋の各地域の歴史を分析してあてはめ、同時代的に並列・比較していく方法であった。当時は我が国をいかに近代化・民主化していくかということが大きな課題であり、「世界史」も、近代化・民主化の拡大過程として把握しようとした。それに対して、東洋史学者や地理学者の一部から批判が出され、特に京都大学出身者による「世界史」は、ヨーロッパ中心史観を脱却すべく、文化圏別の構成を当時から目ざしていた。また、特に社会科の教科目としての「世界史」のあり方を考える時、単元別構成をとった広島史学研究会編『世界史研究』の試みは大いに評価することができる。「世界史」が明確な目標も学問的背景ももたないままに始められたため、「世界史」の根柢を内容の構成方法に求める時、多様な意見が輩出したのはやむをえないことであった。こうした時に、現に存在する歴史的事実の配列をどうするかという発想ではなく、現在の日本人の問題意識に立って、世界史を「認識、表象、構想」すべきであると主張したのが上原専禄である。上原専禄の歴史理論・世界史理論は『歴史学序説』（大明堂、1958年5月29日発行）他多くの著書で発表されるとともに、「世界史」の具体的な成果としては『世界史講座』全8巻（東洋経済新報社、1955～56年）や『高校世界史』（実教出版社、1956年1月25日発行）として結実するが、上原専禄の世界史理論については、別稿で検討することにした。<sup>(39)</sup>

## 注

- (1) 高橋磯一「歴史教育の基本問題」（『社会科教育』1949年8月号）、尾鍋輝彦編『世界史の可能性—理論と教育—』（東京大学協同組合出版部、1950）、P263より再引。
- (2) 当時の状況を、井上清は「世界史の氾濫」と表現した。井上清「世界史の氾濫」（『歴史学研究』144、1950）
- (3) 本書については、遠山茂樹著『戦後の歴史学と歴史意識』（岩波書店、1968）や成瀬治著『世界史の意識と理論』（岩波書店、1977）などでも詳しく取り上げている。
- (4) 『世界史の可能性—理論と教育—』、P1
- (5) 同上、P6
- (6) 同上、P7～P9
- (7) 同上、P11
- (8) 同上、P22～P23
- (9) 同上、P24
- (10) 同上、P24～P25
- (11) 同上、P25～P29
- (12) 同上、P33～P36
- (13) 同上、P45
- (14) 同上、P50～P51
- (15) 同上、P46～P47、P59、P60
- (16) 同上、P51～P53

- (17) 同上, P 54~P 56
- (18) 同上, P 62
- (19) 同上, P 65~P 68
- (20) 同上, P 145~P 156
- (21) 同上, P 160~P 166
- (22) 同上, P 181~P 186
- (23) 同上, P 187~P 200
- (24) 同上, P 201~P 214
- (25) 同上, P 217
- (26) 同上, P 241
- (27) 「高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について」(1949年4月)中の一項目。
- (28) 『世界史の可能性—理論と教育—』, P 266~P 270
- (29) 同上, P 274~P 278
- (30) 吉田寅「世界史教育の変遷」(『歴史と地理』286, 山川出版社, 1979, P 71)
- (31) 『西洋の歴史(1)』(中等学校教科書株式会社, 1947), P 1
- (32) 同上, P 2~P 4
- (33) 東京大学文学部史学会編『世界史概観』(山川出版社, 1949), P 1
- (34) 『新制世界史』についての記述は, 上野実義「諸外国の世界史教育と日本の世界史教育」(前川貞次郎・木村尚三郎・平田嘉三編『双書新しい世界史教育1』(明治図書, 1972), および, 山本一成「世界史の構成に関する史的研究(三)」(『歴史と地理』236山川出版社, 1975)による。
- (35) 京都大学世界史研究会編『新しい世界史』(数学研究社, 1953), P 1~P 8
- (36) 広島史学研究会編『世界史研究, 上』(柳原書店, 1950), P 4~P 5
- (37) 九州大学世界史研究会編『世界史』(世界社, 1951), P 16~P 17
- (38) 『世界史の可能性—理論と教育—』, P 299, 但し, その構成を見ると, (1)原始時代の生活—文化のあけぼの—, (2)オリエントの文明—大河の流域とその周辺—, (3)古代インドの生活と宗教—カストの社会—, (4)黄河流域の文明—中国文化の源流—, (5)ギリシア人とギリシア文化—古典文明の形成—, (6)地中海世界の統一とローマ人の遺産—古代帝国の完成—, (7)黄河流域から揚子江流域へ—中国古代文化の大成一, (8)ヨーロッパの封建社会—ヨーロッパ諸民族の形成—, (9)キリスト教の普及とヨーロッパ文化の形成—中世の宗教と社会—, (10)中世アジアの世界—東洋諸民族の活動とその影響—, (11)人間精神の解放とヨーロッパ世界の拡大—近代への出発—, (12)ヨーロッパ近代国家の発達—重商主義と絶対主義—, (13)近代民主主義の発達—民主主義と立憲主義—, (14)産業革命の発展と帝国主義—世界のヨーロッパ化—, (15)19世紀の社会と文明—機械文明の時代—, (16)清の盛衰とヨーロッパ勢力の東進—古い中国の崩壊—, (17)アジア諸民族の新時代—新中国の誕生とアジアの目ざめ—, (18)第一次世界大戦—帝国主義の運命—, (19)第二次世界大戦と国際情勢—ファシズムの敗北—, となっており, 「世界史」を目ざして考えられた構成となっている。
- (39) 有田嘉伸「上原専祿の世界史理論」(『社会科教育の理論—平田嘉三先生退官記念論叢—』, ぎょうせい, 1989) 参照。